11 設計演習ⅢB 面構造によるニュー・ミュージアム空間

開講年次：学部３年生第２クォーター

［担当教員］
竹口健太郎（客員教授 / アルファヴィル一級建築士事務所） 光嶋裕介（特命准教授）
［Teaching Assistant］
松岡絢加（A70） 山荘日捺子（A70）

■課題概要

ニュー・ミュージアム空間を（面状の構造により）計画する（面状の構造とは、柱や梁による線材の架構ではなく、壁面 / 床面 / 屋根面の連続により構造躯体として成立するものをいう）。構造計画に関しては厳密な構造計算による根拠は求めないが、モデル検討及び構造力学的見地に立った基本的な考察を必要条件とする。この構造体を構成する材料は石・コンクリート・鉄・ガラス等一般的に流通するものとし、社会的な合意を得られるコストを前提とすること。また、平面計画や建築造形において形態的メタファーによる合意を目的とせず、計画する環境（場・空間）に対して身体的な関心と理解を探求すること。美術を展示・鑑賞する空間を熟慮し、そこに「新たな豊かさ」をうみだす建築的手続きを重ね、空間の特殊性を構造・構成・構築概念を手がかりに物理的提案として創出する。

■設計条件

下記のリストより各自が美術家を選択（リスト外からも選択可能）、その作品を展示し、新たな魅力を創造するニュー・ミュージアムを設計する。敷地の選定においては、選択の必然性を前提とすること。その他必要空間を設定し理想的な外部環境・ランドスケープを含めてのニュー・ミュージアム空間を提案すること。延床面積は 2000 平米程度とする。

【美術家】
（絵画）
・ジャスパー・ジョーンズ
・ジャクソン・ポロック
・キース・ヘリング
・草間彌生
・マーク・ロスコ
・ゲルハルト・リヒター
・バンクシー

（彫刻）
・リチャード・セラ
・イサム・ノグチ
・アントニー・ゴームリー
・クリスト
・ダムタイプ
・エドゥアルド・チリーダ
・アレクサンダー・カルダー
・オラファー・エリアソン
・名和晃平

（写真）
・アンドレア・グルスキー
・杉本博司
・トーマス・デマンド
・森山大道

■敷地

各自設定。設定した人物にふさわしい敷地を選ぶこと。

■提出物

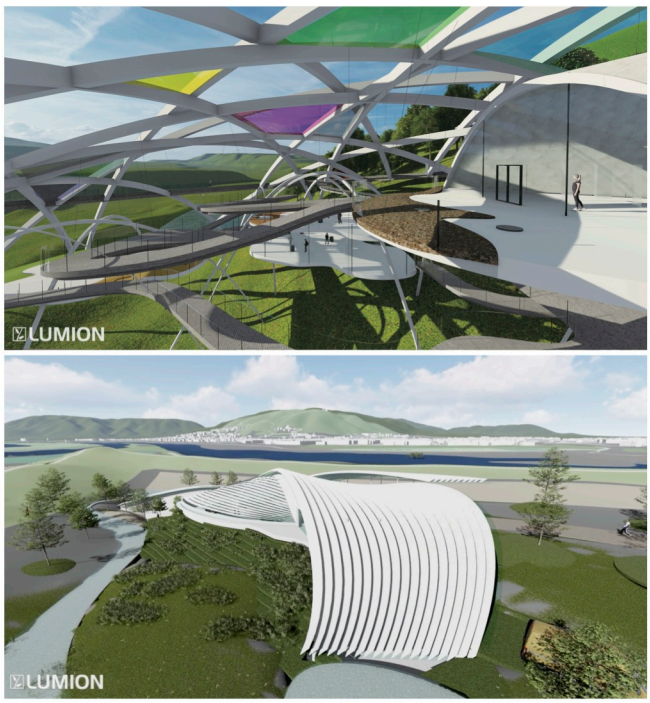
A1 図面 3〜5 枚程度、完成モデル 1:100（またはアニメーション）、必要図面は各自設定し、第三者に十分な理解を得られることを目的とする。

■講評会の様子

竹口スタジオ、光嶋スタジオそれぞれで、履修者全員を対象としたスタジオごとの講評を行ったのち、各スタジオで優秀だった履修者を対象に全体講評を行った。

スタジオ別の講評

全体講評

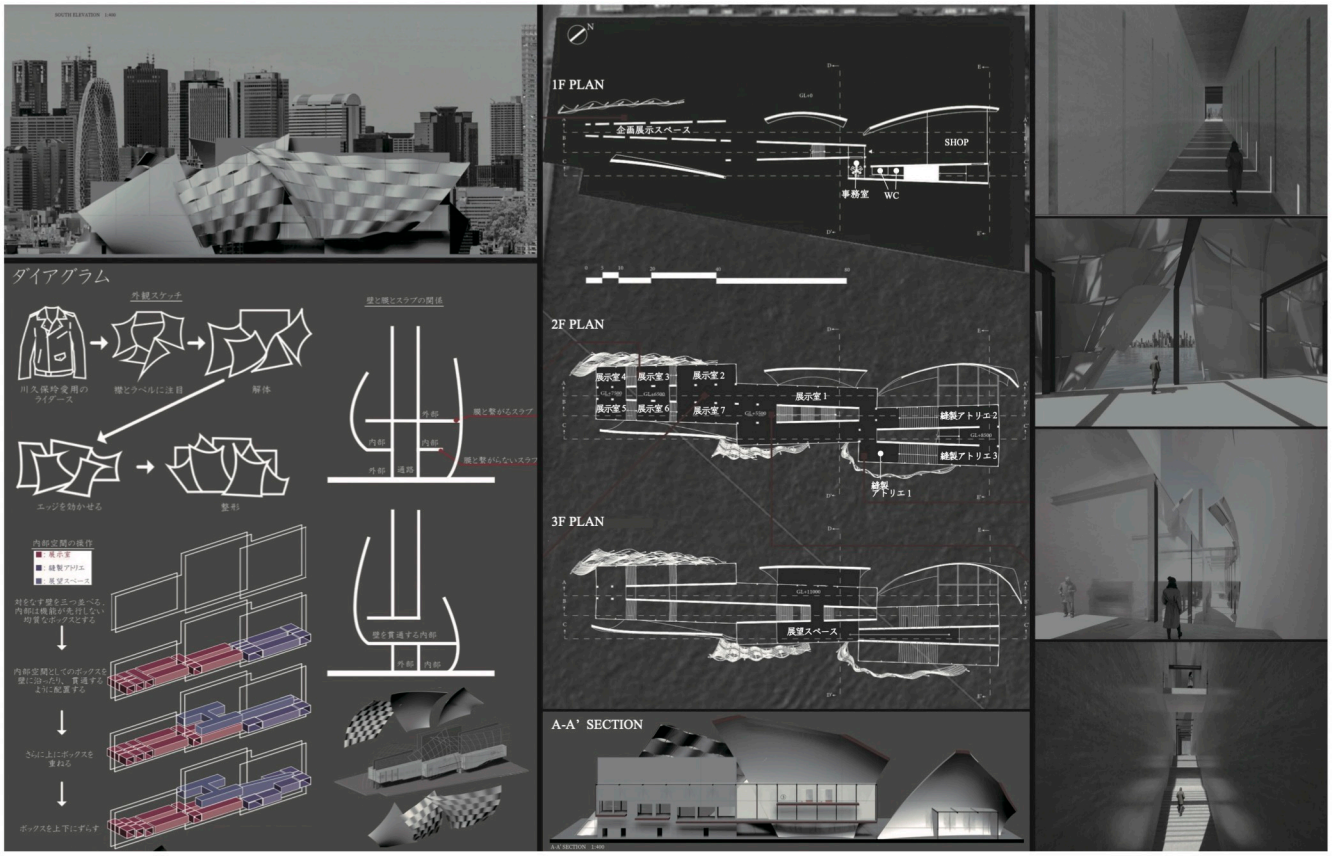


提出されたアニメーションの例（製作：金谷百音[上]、山口沙礼[下]）

未目的狭路 ー壁と膜に挟まれた空間の連続と交差ー

千馬生吹

ファッションブランド「COMME des GARCONS」の創設者である川久保玲のニュー・ミュージアム。 氏愛用のライダースを解体・整形したような造形と なっている。ある時は展示室、ある時は縫製所、ある時はコレクション発表の場として。 すべての行為と空間が対等になりうる未目的の空間の提案。

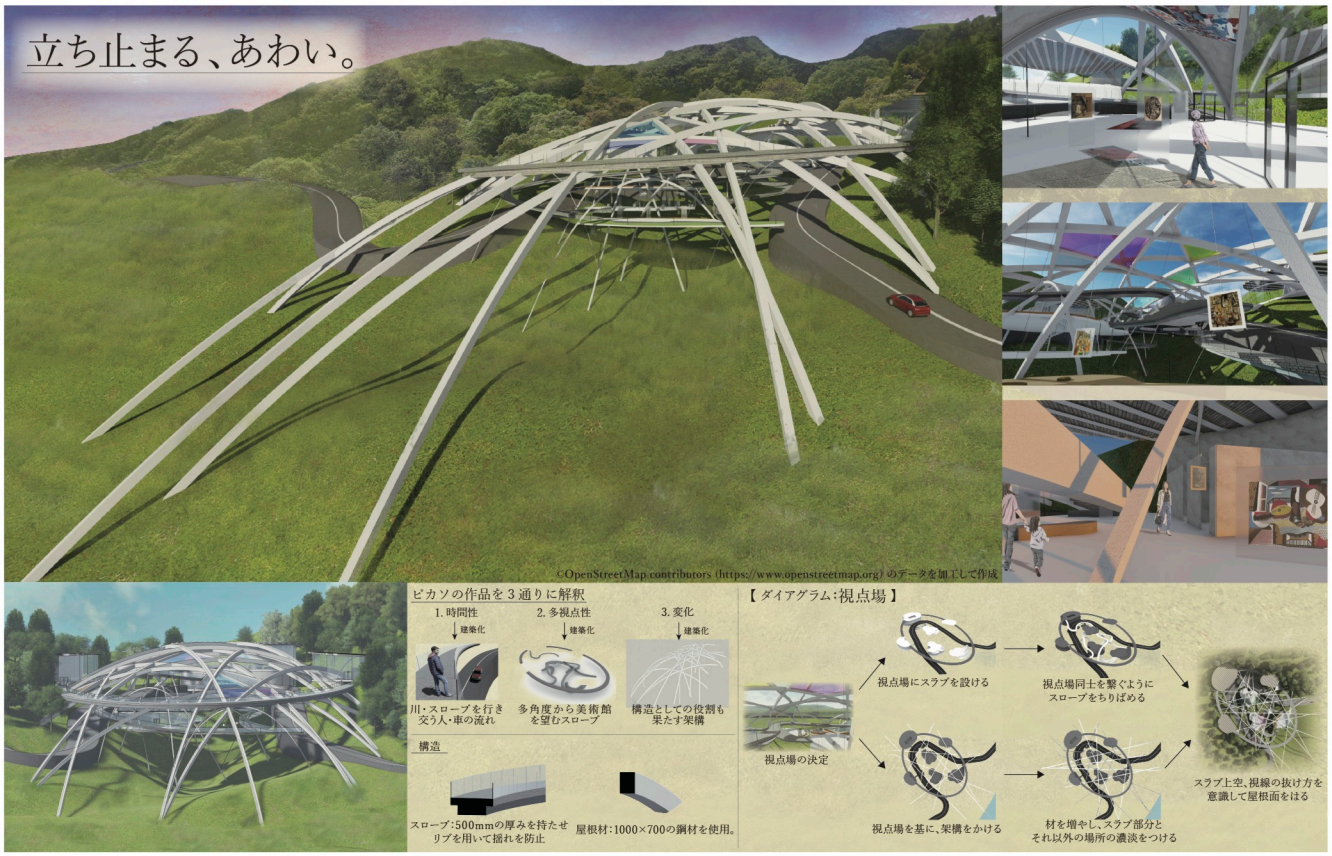


＊左上の立面図の背景写真は、Adobe Stock（oben901-stock.adobe.com/jp）より引用

立ち止まる、あわい。

金谷百音

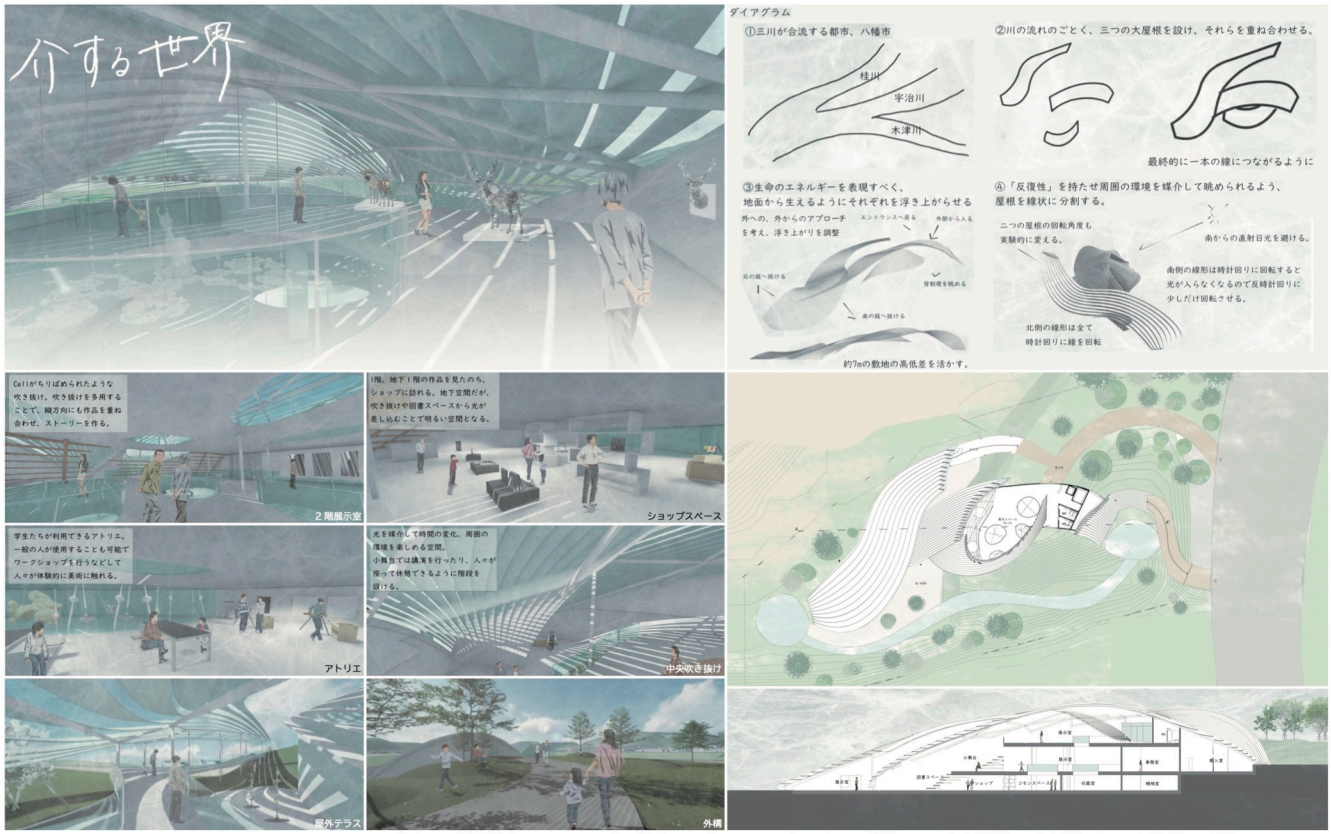
山と信濃川に囲まれた立地で都会の忙しさから逃れ、 立ち止まる事のできる美術館を設計する。 伸びやかな構造体が構造的、 意匠的側面を持ち、その軽やかさや虚構感がピカソの画風とマッチする。 ピカソの時間性と多視点性を建築に落とし込んだ。



介する世界

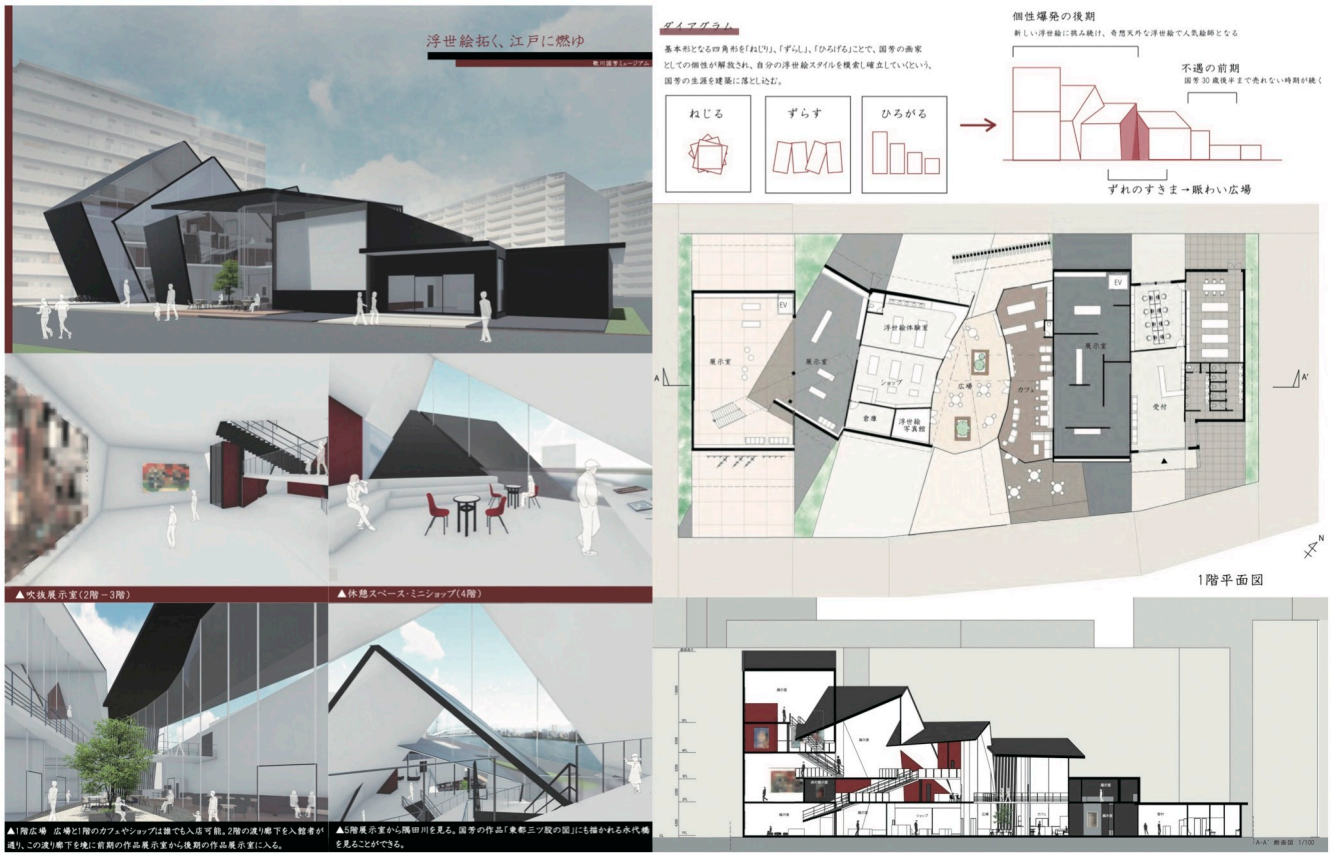
山口沙礼

芸術家 名和晃平のニュー・ミュージアム。 氏の作品 PixCell は現代の人々が世界を画像を媒介として眺める様子を表現したが、 本作品ではこの媒介をキーワードに、 ルーバーを通して光、 周辺の緑や水を眺め、 生命力や周囲の自然への溶け込みを身体的に感じられる美術館を目指す。



＊各パースの作品画像は、 KOHEI NAWA ウェブサイト . http://kohei-nawa.net/works/others （参照 2022-7-26）より引用　＊右上メインパースの作品画像の一部は、 Discover Japan. GINZA SIX 中央吹き抜け新作アート！ 先見性と創造性をあわせもつ、 日本を代表する彫刻家・名和晃平の作品を展示 . 2021.4.9. https://discoverjapan-web.com/article/56348 （参照 2022-11-7）より引用

浮世絵拓く、江戸に燃ゆ　歌川国芳ミュージアム

長谷川晶穂

江戸時代後期に活躍した浮世絵師、 歌川国芳の美術館を彼が生まれ育った地、 東京・隅田川沿いに設計する。 庶民的で明るい性格だった国芳の性格を踏まえ、 下町のように店や人が集まり活気のある美術館を目指す。 国芳の作品で差し色にされた「赤」を差し色とし、 全体を引き締める。